

私の四川省一人旅5 <理塘へ向う>

田井 元子

5時半にしかけておいた目覚まし時計で目を覚ました。いよいよこれから旅の核心部に向かうという朝だ。バスの出発は6時半。いつもは寝起きの悪い私も、心地良い緊張に包まれて飛び起きた。

急いで顔を洗おうと共同の洗面所に向かうと、中から真っ赤なブリーフ一枚の男が出てきてギョッとする。隣の部屋に泊まっていた漢民族夫婦のおじさんだ。ここは中国の安宿なので、とりあえず裸なのは許すとしても、何なんだ～！そのパンツの色は！

度肝を抜かれながら歯を磨いているうちピンときた。真夏の成都でひと時の涼を求め、スーパーマーケットをひやかして歩いていると、下着売り場の一角に真っ赤な下着コーナー

があったのだ。真っ赤なパンツには「吉祥如意」やら「財源廣進」などの文字が金糸で刺繍されており、「さすが中国！」と大いにうけた私は、日本に帰る折には何枚か買い求めて友人に配りたいものだと思っていたのだが、期せずしてその招福パンツを日常的に着用している中国人に出会う事ができてしまった訳だ。こんな機会はそうあるものでもないだろう。やはり私の旅はツイている。

すばやく身支度を済ませ、バスの乗客向けに早くから開店している食堂で水餃子を食べるとバスターミナルに向かった。やはりチベット玄関口の街、康定である。早朝にも関わらず各方面に向かうバスと乗客でターミナルの中はざわめいていた。

今日の目的地は世界で一番高い街。標高4000メートルに広がる大高原の中に、忽然と現れるチベット民族の街、理塘だ。前回訪れた時にはこの街で高山病にかかり激しい頭痛に悩まされたが、今回は四姑娘山で5000メートルを体験済みだ。既に高度順応しているので高山病の心配もない。そう思うと自分の身体が少しチベット人に近づいてるような気がして嬉しかった。

「それは唐突な出会いだった・・・バスに乗り込むと、そこにチベットがあったのだ」

主に東南アジアを中心とした旅の体験記を数多く執筆されている下川祐二氏の著書、「歩くアジア」の中の一説である。下川さんは以前私が営んでいたタイ料理屋で、店のお客様として懇意にいただき、当事出版された本を何冊か頂いていた。この著書の中では「日本から飛行機を使わずにアジアを横断して、イスタンブールまで辿り着けるか」という旅に挑戦しておられ、バスで厳冬期のチベット越えをするくだりでは、やはり早朝の康定でバスに乗り込みチベット圏に向かって旅立っていくのだ。

その時から10年ちかくもの月日が流れていたが、その朝、私が理塘行きのバスに乗り込むと、やはりそこにはチベットがあった。

理塘に向かうバスは、それまでとは全然違っていった。前日成都から康定まで乗ってきたのは設備も乗客もごく普通の大型長距離バスであったのが、ライトバンを少し大きくしたような古ぼけたミニバスに変わっていた。バスの後部に荷物を積み込むようにしてあったが、他の乗客の荷物で既に満杯。ほんの隙間に自分



のザックを無理やり押し込み、バスに乗り込むと私は一瞬目を見張った。先に乗り込んでいた乗客は全員チベット人だったのだ。康定の一般的な住人たちより貧しげな衣服の者が多かった。頭にサンゴやトルコ石の髪飾りをつけ、民族衣装に身を包んだ遊牧民の姿もあった。

バスの中はほんのりと土の香りがしていた。それはこれまで私が乗ってきた下界のバスとは明らかに違う世界であり、漢民族とチベット族が半々で構成されている康定の街よりも更にチベット色の凝縮された空間だったのだ。私の勝手な想像では、このバスの乗客達が成都まで出て行く機会はそれほど無いように思えた。康定より奥のチベット圏に暮らす多くのチベット族の人達にとっては、康定が最大の都会なのではないだろうか。それぞれ何かの用事で康定にやってきて、これから自分の街に帰るところなのではと思われた。

座席番号などは勿論無く、乗り込んだ順に思い思いの場所に座るようになっていたので、私はチベット服に身を包んだ女性の隣に腰掛けた。

私が席に着いた少し後、西洋人の若い女性が一人、大きなザックをかついで乗り込んできた。彼女も車内の雰囲気は一瞬戸惑ったような表情を浮かべたが、私の席から通路を挟んだ一人掛けの座席に腰掛けると真ん中の通路にザックを置いた。彼女の大きなザックは後部座席に向かう人たちにとってはかなり邪魔な感じだったが、私が乗った時には既に満杯だった荷物置き場に、彼女のザックを置く場所は残されていなかったのだろう。座席のスペースは狭く、大柄な彼女が座ると通路以外に荷物を置ける場所は無かった。

座席が全部埋まりこれで出発かと思われたが、それでも乗客は次々と乗りこんでくる。満席になった後は通路に補助椅子を出し、そこにも人が座るのだ。補助椅子まで全部埋まったところで定員となるようにチケットが売り出されているようだった。

私と西洋人女性の間にも、少し汚れた身なりのチベット族の青年が座ろうとしていた。しかし彼女の大きなザックが邪魔をしてなかなか補助椅子を倒す事ができない。やっと倒しても座席の前のスペースをザックがいっぱいに埋めているので足を下ろす事ができず、下ろせばザックを踏むような感じになってしまふ。西洋人の女性は申し訳なさそうに「かまわないから足を置いてください」というジェスチャーをしたが、チベット族の青年は慌てて足を引っ込め、身体を曲げて多少不自然な体勢をとると、なんとか自分の足がザックに当たらないように腰掛けて彼女に笑顔をみせた。

それはやむを得ない事だったとはいえ、他の席の場所にザックを置いている西洋人の彼女に少し非があるような出来事に感じられたが、彼は迷惑そうな顔ひとつしなかった。そんな青年の穏やかさが、見ていた私にも嬉しく感じられ、ついこれが日本だったらどうだろう・・・と思いを廻らせてしまう。着ている服は土で汚れていても、この青年には他人を思いやる心のゆとりが感じられた。この土地でチベット族の人達に接していると、そう思う事にたくさん出会う。

私と西洋人の彼女以外はチベット人ばかりで満杯になったミニバスが出発した。

バスの最前列には精悍な顔立ちに髪を長く伸ばしひげを蓄えた、一目で遊牧民系とわかる男性が、少しくたびれたスーツを着込んで乗っていた。乗客ではあるが、人数確認をしたり、車酔いで気分が悪くなってしまった女性のために運転手に命じて車を止めさせたり、まるで車掌のようにバスを仕切っているような感じだ。都会に行くからとお洒落をしていたのだろうか。彼には申し訳ないがスーツは全然似合っていない。私の目から見たらそれはちょっと滑稽にみえた。チベット族の衣装を着ているほうが何十倍もカッコ良いのに・・・。

彼らにとって民族衣装は誇りのあかし。身に着けた飾りの多さで自分の力を誇示しているのだと本で読んだが、それもだんだん過去の事となっているのだろうか。私がこの土地にひかれた大きな理由の一つが、彼らチベット遊牧民の格好良さだったのだ。どこまでもつづく草原で馬を駆る彼らの姿は、アメリカ開拓時代のカウボーイを想像させるが、どこかそれよりも勇壮でロマンチックで、私は出会うたびにウットリ

して見つめてしまう。天上の世界で自由に暮らす彼らにスーツなんて似合わない。都会の人間の真似事などせず彼らの世界で誇り高く生きて行って欲しいなどと思うのは旅行者の勝手な感傷だろうが、やはりそう願わずにはいられない。苦笑と共にちょっぴり胸の痛みの混じった複雑な気持ちで、私は彼の後ろ姿を見ていた。

バスは街を抜けると直ぐにどんどん高度を上げて走っていく。高度が上がるにつれて車内の気温も急速に下がってきた。康定の先には標高4298メートルの折多峠^{せつとう}が在るのだ。この道を何度も経験している私はあらかじめ用意していた服を取り出し次々と重ね着して行くが、西洋人の女性は寒そうで、目が合うと、「あなた準備良いわね」というような目をして微笑んだ。



峠の最高地点には仏塔が建てられ、お経の書かれた色とりどりのチベット式の旗、タルチョがはためいている。観光バスなら間違いなく車を止めて記念写真を撮るポイントだが、現地人ばかりの公共バスはあっという間に通りすぎてしまう。ふとみれば、私の隣にすわっているチベット青年は頭を西洋人の女の人に持たせかけて眠ってしまっていた。彼女はそれを疎ま^{うと}しがる事もせず、そのままにしてあげている。優しい人のようだった。

ウトウトしているとバスが止まった。新都橋という街だ。乗客たちがバラバラとバスを降りて行く。寝起きでぼんやりしている私に、「あなた英語が解かる？」と西洋人の女性が話しかけてきた。

「少しだけ」と答えると、ホッとしたような表情をうかべ、「一体何が起こったの？」と訊いてきた。やはり長距離バスというよりは地元民ばかりの乗り合いバスの様な雰囲気の中で、一人だけ言葉も通じず不安だったのだろう。「ただのトイレ休憩だから大丈夫。私たちも行きましょう」と一緒にバスを降りた。

市場の裏手にある公衆トイレは思わず笑ってしまうほどの汚さの上に、中国ではおなじみの、腰の辺りまで仕切りがあるだけの壁もドアも無いトイレだったが、彼女も慣れているのか臆することなく、私たちは並んで用を足した。バスに戻ると改めて自己紹介しあう。彼女はスウェーデンからやってきた観光客なのだそう。どうりで彼女の肌は透き通るように白い。

女性一人でここまで来ている観光客同士の親しみが感じられた。英語で書かれたガイドブックの地図を広げ、「あなたは何処に行くの？」と聞かれたが、私の目的地である亜丁は、そのガイドブックには地名も載っていなかった。おおよその位置を指で示しながら、「とてもキレイな場所なのよ」と言うと「私は知らない場所だわ」と悔しがりながら笑顔を浮かべた。朝からのチベット青年とのやりとりの様子から、彼女もこの土地や人に対して愛情を持っているように感じられ、もっと話してみたいような気もしていたが、私たちの間に座っているチベット青年が戻ってきたため会話は中断され、バスは再び走り始めた。

西洋人の彼女がブドウを取り出し隣のチベット青年や私に勧めてくれた。私もお菓子を取り出して二人に配った。最前列の補助席に座っていたスーツ姿の遊牧民の男は、奥さんだと思われるチベット服姿の女性に膝枕して居眠りしている。

理塘に向かう満員バスの中の空気は和やかだった。(続く)

